

巻 頭 言

「研究を成し遂げる要諦は立志にあり」と思い始めてから久しい。研究、教育、事業等、何事においても継続が大事であることは言を俟たないが、研究を継続して成果を挙げるにあたって、学問の面白さを感じて止まない好奇心はあって当然、それだけでは寸暇を惜しんで考究を発展させ、己を磨き高めていく原動力には少し足りない。時間に限りがあっても、心身に疲労が溜っても、それを乗り越える克己心を与えてくれるのは「志」であり、立志なくしては講究の継続も成果もあり得ないのではないかと思う。

ここに著された冊子は、英語コミュニケーション紀要である。本紀要は、日頃から学生の人間形成・学力向上へ熱心に取り組む教員が、内外の種々な業務に忙殺されながらも、研究の「志」を高く掲げて自らを弛まず磨き上げ続けた成果を問うものである。教育の場で磨いた感性と研究の場で培った知見を基に識見を披露する賢兄諸氏の充実した力編七篇をどうかお読みいただきたい。また、本紀要には本学教員の学術研究会、学生向けに実施した特殊研究講座、学位請求論文題目および卒業論文題目を収めてある。学科全体の「志」をも見て取っていただければと願う。

かつて南北朝時代の虎関禅師は「古教照心、心照古教」と講じた。学問においては、古の賢を尊び、道を慕って謙虚に学ぶことが大切であると同時に、先人に学んで自ら抛って立つ礎石を作り上げ、慧眼を養った後に、自らの明察によって古の教えを照らし、それに新たな光を放射するところまで進まねばならないという、含蓄ある訓えである。本学科教員は、教育指導や研究の場においてこの心がけを決して忘れず、足許磐石に高みを目指し、学道の兄弟として道友和合し、互いに明德を明かにせんと精進している。身内ではあるが、本紀要への投稿者および編集者には、その努力を称え、感謝の念を表わしたいと思う。ささやかながら本紀要をひとつの拠点として、英語コミュニケーション学科を中心とする教員の研究・教育活動が従前以上に一層活発になることを関係者一同期している。大方の今後のご支援・ご鞭撻を願ってやまない。

最後に一言、お許しいただく。“Pax intrantibus, Salus exeuntibus.”「歩み入る者に安らぎを 去り行く者には幸せを。」本紀要はまた、新たに入学する者も含めて、一つ階段を昇って歩む在学生たちへの講話でもあり、この三月に学舎を巣立った卒業生たちへ贈る教旨でもある。特に卒業生諸君は、在学中に身につけた知性と教養を活かし、教場で研磨した思考力・判断力をもって事にあたり、慈しみ深い理解と愛情を周囲へ及ぼし続けて、豊かな人生を歩んで欲しい。本学で錬成した星霜の間に、学問の教導によって卒業生一人ひとりの心の中に「志」が宿り、立志実現への勇気と力を与えられたとしたら、私たちにとってこれに勝る喜びはない。

(英語コミュニケーション学科長 井原奉明)